
bio hazard ~ place of promise ~

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

bio hazard → place of promise

【Zコード】

N4236D

【作者名】

あぐあ

【あらすじ】

普通の高校生活をおくっていた天富悠介あまみやゆうすけしかし、突然の災厄に襲われてしまつ。変わりゆく人々。未知なる怪物達……。しかし、それらに立ち向かう者達がいた。絶対に約束の場所に帰ると。七人の脱出劇。果たして彼らは生き残れるのか……バイオハザードのオリジナルシナリオ。バイオハザードが分からぬひとも分かつてもられるように書いています 評価もぜひおねがいします!!

人物紹介&あいさつ

はじめまして（^o^）／
あくあと申します

この度は初めて小説を書かせて頂くことになりました
宜しくお願ひします（ーー）
なにかおかしい部分があればメッセーージくださいね
おつと、おしゃべりがすぎました（笑）
では最初はキャラ紹介からにしたいと思いまーす

アマミヤコウスケ
天宮悠介

16歳の高校生。近くの私立学校に通っている。
特技としては、ITに詳しいこと。後スポーツもかなりできる方で
ある。勉強はそこそこ。

性格は正義感が強く、誰とでも仲良くできる人望厚い人間である
幼馴染みの水島理名と文化委員の居残りしている最中に災厄に襲わ
れてしまつ。

髪型は黒のショートヘア。顔はキリッとしている誰もがイケメンと
思つほど。

水島 理名
ミズシマコナ

悠介と同じ学校に通つていてる女子高生。同じ16歳で特技は……こ
れといったものはないですが、頭脳明晰。容姿端麗といったかんじ
の美少女です（特技の追加は後ほど）

性格は、自分が言いたいことをなかなか言えない性格。涙もろく、

人に優しく。自分に厳しくの言葉がぴったりである。

髪型は黒と少し茶色（生まれつきの色が混じっているもの）です。顔は先程申した、容姿端麗でどちらかといつと綺麗ではなく可愛い

が出ていると思います。

二ッタカンジロウ
新田官次郎

悠介の16歳の親友。いつも悠介がなにを仕出かしたときに助けてくれたり、一緒にバカなことをやつたりする。

特技は、野球や球技。また、剣道もならつていてるためかなりの腕前も持つており、実際に刀も使ったことがある。

放課後、部活が遅くなり部室に入り片付けをしようとしたり、部員のゾンビに出くわしてしまう。

性格はかなり几帳面。調べものや探し物はこととんまでさがすほど。学年からは

「カンちゃん」というあだ名で親しまれている。

髪型は野球部員のイメージがあるが実際はヤミロングくらいである。

顔は勿論野球少年の顔です（笑）

以上です。＼＼＼＼＼

また追加するキャラはいるので、それは登場した章のあとがきに書きます（^__^）＼

ではまた更新します

「悠介、早く起きなさいーーもう学校始まるわよ、なにしてんの？」
毎度毎度、悠介は目覚まし時計を合わしても起きられない性分で、
いつも母に起こされている。

「なに言つてんの……まだ7時じゃないか。
つてヤベエ！？」

悠介は常人には決してできないほどの速さで起きて顔を洗い始めた。
「母さん！もう8時15分じゃん！学校は8時30分から始まるの
知つててやつてるんだろ！？」

「そういうあんたこそ何時までも幼稚園みたいに起こしてもらわな
いとダメなの！？」

天宮家の朝はいつもここから始まる。母と悠介が口喧嘩してゐるなか、
ただひとり黙々とパンを食べているのが父である。
「まあまあ、いいじゃないか母さん。結果的には悠介学校に間に合
つてるんだからさ……」

「父さんは甘いのよ。悠介はこつでもしないと懲りないんだから。
「じゃあ母さんも少しごらい頑張つてもいいんじゃないかな？
「……父さんも早くしないと仕事大変よ！」「
「はいはい……」

その時、制服に着替えた悠介が洗面所からでてきた。

「悠介、ご飯は！？」
「いらない！」「
「あいよーー気をつけていくんだよ。」「
「行つてきます！」「

悠介は急いで家をでた。

「まつたくあの子は……」

性格が大雑把な母親と、冷静沈着な父親をもつ悠介。これが両親を
みる最後の日になつてしまふとは……。

悠介は走っていた。いつもの通いなれた道を。いつも通りの幼稚園に向かう子ども達の行列。電車の発車がきになるのか常に腕時計を見ながらホームに向かうサラリーマン。悠介にとつてはもうお馴染みのパターンである。そして、もう一つは…。

「悠介！」

後ろから同じ制服を着たセミロングの髪型の男がきた。

「おう、カンちゃん！」

この男こそが新田官次郎である。

「なにのんきに言つてんの…

あと3分で行かないと鬼のグッサンにまた怒られるぞ…。

「あつ、やつべ〜」

悠介と官次郎はスパートをかけて校門に向かつた。

キーンゴーンカーンゴーン… キーン

「後少しだぞ！」

悠介がまた走り出した。官次郎も負けずと走り出した。すると校門の前に腕組みをしている男がたつていた。

「ヤベエ、グッサンだ！もうだめだつたか…」

「いや、まだ29分55秒だ！」

あと5秒で悠介達と校門の距離は30m。

5、4、3、2

「あつぶねえ！」

悠介は早くもゴールした。

1、0、2

「よつしゃ、着いた！」

官次郎もギリギリ、ゴールをきれた。

「天宮と新田！これからはもっと早起きしろー。

後天宮！お前朝飯食つてきて無いだろ！？足にキレがなかつたぞ。

「以後気付けてます！」

「あと新田！息が切れるのはやいだぞ！もつと早く寝ろ。」

「はつ、はい！」

じつして、鬼のグッサンの話しが終わり朝のS.H.Rに向かつた。

「おはようござります！！」

「はいはい、天宮と新田。遅刻と……」

「まつてくださいよ先生！俺たち山口先生に止められたから遅くなつたんですよ。」

「なら早くこればいい。」

こうキッパリといふのは田浦先生しかいない。なかなか固そうに見えるが悠介達をいつも助けてくれる女教師である。

悠介たちは高2だが、2年生になるにはきわどいラインで、天宮と新田のために頭を何回も下げたほどである。

「えつ……」

「さ、早く席に着きなさい。」

じつして、いつものS.H.Rが始まつた。

「え、早速だが学級委員から緊急の連絡があるようだ。」

すると、学級委員が一人前にでてきてこう話した。

「皆さんもご存知の通り、明日は文化祭です。しかし見ての通り、文化委員の一人は欠席となつています。

そこで、臨時の文化委員を決めたいと思います。男子と女子それぞれ一名決めたいと思います。」

クラスはざわついてきた。なかなか決まらないなか一人が発言した。

「天宮がいいと思います！」

すると、その野次馬について

「天宮でいいんじゃないかな？」

「賛成賛成！」

誰からも視線を集めた天宮はその場で立ち、

「よし、やつてやるか！」

オオオー！！と声が木靈しそばらくして拍手が起こつた。

「天富くんありがとうございます。次は女子なんですが…」

またざわついてきた。先程の野次馬についてだが、野次馬は男だから下手に女にはあまり口を聞かないタイプである。すると女子の一人が呟いた。

「理名やつたら？..」

理名とは、クラスで一番可愛いと思つほどで頭脳明晰でもある。

「なつ、なんで私がやらないちゃ…」

「だつて、天富バカじやん。じつこつときにはエリーも必要つてこと。」

「賛成！水島さんなら出来ると思います。」

理名が反論する事もなく、推薦といふことで決まつてしまつた。

「水島さんありがとうございます。これで終わります。」

「じゃあ解散！」

先生の一喝でクラスはまたざわめきだした。

悠介も渋々授業を受けながら4時間目も無事に終わり昼食のじかんとなつた。悠介はきまつて学校の屋上で昼食を官次郎と食べるのが習慣である。

「はあ、なんか今日は疲れるな…」

「だなあ、なあカンちゃん。今日部活あるの？」

「ああ、じゃあ一緒に帰るか！」

「OK」

官次郎が鼻歌を歌いながら空を眺めている間、悠介はなにかを見つけた。

（なんだあれ…？）

そこには、白衣をきた男と黒いスースを着た男が学校を眺めながら何かを話している。

（まあいいか……）

「おーい、悠介」

「あつ、わるい。」

キーンゴーンカーンゴーン。

「あ、もつかよ。じゃあいくか…」

悠介と官次郎は急いで自分達の教室に向かった。

今日あしたの文化祭のため6時間目しかない。掃除も無事に終わり、終わりのS H Rも終わり先生の話の途中である。

「明日は文化祭なので部活もいいが、できるだけ何か手伝つてほしい。」

先生の長いトークに付き合ひきれず、一人は寝ていた。

「なあ、新田。」

官次郎が見上げてみるとそこにはピクピクさせた田浦先生がいた。

「おれむりです。」

「残念だ……、確か野球部はいそがしいからな。」

もうすぐ試合がある野球部はそんなことには参加している暇はない。「じゃあ、文化委員はこの教室に残つて飾りつけの準備を頼む。じゃあ解散。さよなら。」

『さよなら!』

みんなはそれぞれのもち場所に行つたので、残つたのは悠介と理名だけだつた。

「天宮くん?」

理名が寝てい悠介をつついて起こす。

「じめん、寝てた…」

「天宮くんらしいね。」

理名がクスクス笑いながら言つた。

「じゃあ作業始めますか」

理名は用意されていいる材料を言われた通りにして看板を作ることを命じられている。勿論、悠介もである。

「天宮くん手伝つてね!」

「…はーい。」

作業を開始してやや30分。作業も半分が終わりやつとサマになつてきている。

「そういうえば、天宮くんと何かするの初めてだねー、あんなに人気者なのに。」

「考えればそうだな。」

そんな会話をしながら作業を続けていた。悠介も真面目に頑張つてゐる。こんな悠介を見ると誰もがどうかしたのかと聞いてしまつほどである。

「一人でやるとさすがに早いなー」

「楽しいしね」

悠介は少し恥ずかしいのか、いつもの調子になれない。その時、足音が聞こえてきた。

「つそつー？まだできてないのにどうしよう。」

「もう終わつた……」

すると、来たのは一人の生徒だった。何を考えているのか、ドアを開けたところで突つ立つて俯いている。理名が駆け寄つて、

「すいません！もう少しだけ待つてくれませんか？」

理名があれこれ言つていると、その男は一步近づいてきた。

歩き方は普通の生徒の歩き方ではない。のしのしと歩くよつた様子である。

理名はなんとも思わず、

「すいません！あと少しだけなんです。」

悠介も近くまで行こうとしたとき、その男は顔あげ手を伸ばしてきた。

その顔は、皮膚がただれており、肉はただれ落ち大量の出血で骨が見えるくらいである。目に輝きはなく、黒目なはずがどんよりとした白目をしていた。

「オオオオウア……！」その手で理名を掴もうとした。

「えつ……？」

「水島危ない！」

悠介は急いで理名を抱えて男の近くから離れた。

「あ、ありがと…」

あれなに…？」

今にも泣き出しそうな理名の顔がうかがえる。

「気持ち悪いやつだな…」

「ウツ、「ホツ…」

理名はあまりの気持ち悪さに吐き気がおさつてきたようだ。

「大丈夫か！？」

「今は我慢するね…」

その間にも、男はまた呻き声をあげながら手を伸ばし近づいてきた。

「こいつ…！」

悠介が腹にめがけて蹴りを入れた。男は吹き飛ばされて倒れたが、また起き上がりってきた。

「こいつ…」

ゾンビかっ！？」

悠介が驚いてる時、理名が

「今は逃げないと！」

悠介はその言葉で我に帰り、理名の手をひき教室から急いで抜け出した。

「カンちゃんが心配だ！とにかく一度外へ出よつー…」

「でも、ここ三階だからいそがないと…」

悠介達は、急いで外へ走り出した…。

FILE 2 (前書き)

(英語でしゃべっている)

「じんにちは、TIMES squareです。

ここで、ビッグニュースを伝えたいと思います。
日本で大変奇妙な事件が起こっています。人が人を襲い、人を食べるという事件であります。人はまるでゾンビのようであり、日本の総人口一億人以上が死んでゾンビになっているようです！

生存者は極めて少なく、日本の課総理大臣は『三日後に生存者を救助しにきてくれ。その後、日本全域に爆撃して国ごとゾンビを殺してくれ』と遺言を残しました。なぜ今は駄目なのかが分からぬいため、アメリカ政府は三日まつようです。

以上、TIMES squareからお伝えしました。」

悠介達が校舎から外へ向かおうとしている一方、官次郎は部活の終了の集会だつた。キヤブテンと思われる人物が「後少しで試合だからみな油断せずに行きたいと思つ。他のことは前々から話している通りだ。では解散！」

『お疲れ様です！』

その中にユニフォーム姿の官次郎もいた。

「カンちゃん、一緒に帰らないか？」

「ごめん、俺臨時のクソ文化委員待たないといけないからいいよ～

「OK、お疲れ！」

そう言つと、大半の野球部員が校門を抜けていった。

「今日は部室に忘れ物があるから寄らないとな、めんどくさ～」

官次郎はぶつぶつ言いながら部室を目指した。

部室に着くと……

「あ、おい飛島じゃねえか。何してんだそっぽ向いて？」

飛島とは野球部の副キヤブテンであり、今は足の痛みで練習には参加していないのだ。いつも遠くから声を張り上げて指揮をしてくれる重大な人物である。しかし何故か今日は部室にこもりつきりである。

「飛島、お前もいないしグッサンもいなかつたんだぜ。暇で暇で……」
官次郎が呆れた口調で飛島に話しかける。しかし飛島は答えようとはしなかつた。

「おい飛島！何か言つたらどうだ？しかもお前何見てんだ？」

官次郎が後ろから覗くように飛島が見ているところに目を向けた。

「……！」

そこには、人間か分からぬほど無惨な姿の死体が置かれていた。

死因は包丁で何度も切りつけたという浅いパターンではない。死体の身体中に傷があり何処もえぐれているのだ。喰われている。そう言つしかなかつた。

「お前……」

官次郎が飛島に顔を向けたとき、官次郎の身体に悪寒が走つた。飛島の顔は変わり果てており、目は白眼で輝きのないどんよりした目で、顔は肉が同様ただれ落ちていた。まるで重度の火傷のようだ。飛島と思われる人物は顔を見られたかを待つていたかのように前に何かを追い求めているように、官次郎に手をつきだし

「アアアアアアアオオ……！」

不気味な呻き声をあげながら官次郎に近寄つてきた。官次郎はとつさに反応して、飛島と思われる人物の又の下をスライディングで回避した。

「はあはあ……」

お前、ゾンビになつたのか！？おい、飛島！』

飛島の顔はB級ホラー映画に出てくるゾンビのようだ。勿論、飛島は声を返さない。それどころか官次郎に手をつきだして近寄つくるばかりである。官次郎はとつさに近くにあつた金属バットでゾンビの腹を叩きつけた。ゾンビは吹つ飛ばされ、その衝撃で口から汚物をはきだした。その汚物は近くの軟球ボールにかかり、ボールは数秒で溶けてしまつた。そして、またゾンビは起き上がり官次郎に近づいてきた。

「う、うわああああ！」

官次郎はありつたけ力でゾンビの頭に向かつてバットを振り回した。すると、ゾンビの頭は容易く吹き飛ばされその場に倒れ込んだ。

「はあはあ……うつ！」

官次郎は気持ち悪くなりその場で吐いてしまつた。それは、気持ち悪さと何かを殺してしまつたという感覚からきたのであるが。

「ど、どうなつてんだよ……」

官次郎が一息ついて立とうとしたときだつた。さつきまで倒れて死

んでいた死体が官次郎の目の前で起き上がりまた呻き声をあげて手を伸ばしてきた。

「ウワア アアア！！」

官次郎は急いで部室を抜け出した。外は何時もと変わらない景色だつた。

「悠介が心配だ……

待つてろ、今行くからな！」

官次郎は本校舎の三階に向かつた。

悠介と理名は一階に降りる階段に向かつていて。今はまだゾンビとは会つていなのは幸いかも知れない。悠介は安全を確認したのから理名の手を離して立ち止まつた。

「一体、どうなつてんだ……」

「ウツ、グスツ……」

悠介が理名を見るとそこには泣いている理名がいた。あまりの突然の恐怖だつたからであろう。悠介は優しく声をかけた。

「大丈夫だつて、何かの夢だ。いつか覚めるだろう。」

悠介はそういうと理名の髪の毛をくしゃくしゃ撫でた。

「天宮くん……

ありがとう。」

理名は精一杯の声で答えた。その時だつた、前から足音が聞こえてきた。悠介はとっさに理名を後ろに回してかばいの体制をとつた。

「…………

しばらくの沈黙。やつとその正体は姿を現した。悠介は響く声で、

「誰だ！？」

すると、それは気付いたのかこちらに向かつてきた。微かな外の明かりがその顔を照らすとそれは普通の顔の先生だつた。

「はあ……よかつた。」

「どうしたんだ？ そんなに声を張り上げて？」

悠介は今までの状況を真剣に説明した。しかし、先生は

「はつはつは、それは多分文化祭の出し物の練習をしている最中の

サプライズじゃないのか？」

「違うんです！天宮くんがその人腹に蹴りを入れても何も言わなかつたんですよ！？」

「君たち何を言つているのかね？天宮くんのことだ。何かの間違いだろ……」

いつこりうに信じてくれない先生に天宮達は必死に訴えた。しかし、どんなにいつもわかつてくれない先生は痺れをきらして、「いい加減にしなさい！そんなことがあるわけないだろ、〔冗談もほどほどにしなさい。」

その時だつた。丁度、先生の後ろの教室から災厄は現れた。先程の姿姿とは違ひ服はもうたぼろだつた。

「先生！後ろに……」

「からかうのもいい加減にしなさい！」

先生はもう悠介の言葉など信用していなかつた。その間にも先生とゾンビの距離は迫つてゐる。

「先生！」

理名は声をだして必死に訴えた。

「なんだね……」

先生が後ろを向いた時はもう遅かつた。ゾンビは先生の肩を掴み、先生ごと押し倒した。すると、口を開けて首に噛みついた。

「ギヤアアアアア！」

その叫び声も直ぐに止み絶命した。ゾンビは死体をただ黙々とクチャクチャと嫌らしい音をたてて食べていた。

「……くつ！水島！」

悠介はまた理名の手を引いて走り出した。ゾンビはこちらのことをものともせずにただただ「食料」を貪つてゐた。

「くつそ、誰も信用しないか……」

「天宮くん！前！」

すると、先程の声を張り上げたせいか、一匹のゾンビが近寄つてき

た。

「前に一匹、後ろに一匹か……
やばいな、どうする。」

悠介が考えていた間にゾンビ達は近づいてきていた。

「天宮くん……

もう動けないよ……」

理名は最悪の状況の中でパニックに陥っていた。

「……水島、動けるか？」

悠介が不意に理名に質問を出した。理名は少し疑問に思つたが

「大丈夫……」

と、はつきり答えた。

「じゃあ、俺の合図で走ってくれ……」

そういうと、その場から走り出し、前にいる一匹の内一匹をけつて吹き飛ばした。

「今だ、走れ！」

悠介はそう言つたが自分は動こうとはしない。理名は言われた通り、空いてる場所に向かつて走り出した。

「天宮くん！」

「俺はいい！早くにげる！」

悠介はまたゾンビに取り囲まれてしまつた。

「おらあ！まだまだ！」

悠介がどんなに吹き飛ばそうが、叩きつけようがゾンビが死ぬ気配は全くない。

「天宮くん！今……」

「くるな！逃げると言つたはずだ……」

その時、前からゾンビに捕まってしまった。振りほどこうとしても、普通の人間が肩に全体重をかけているかのような力だった。

「ちつ……」

悠介が死を感じた時だった。

「いけえ……！」

遠くから硬球が飛んできて悠介を掴んでいたゾンビの頭に命中した。その影響で悠介から手が離れ悠介は自由となつた。

「やりい、悠介速く！」

投げたのは官次郎だつた。なんとか部室から追い付いたらしく、「カンちゃん！」

悠介は間を潜り抜けた官次郎達の元にむかつた。

「新田くん！ よかつた…」

「水島もいるじゃん。」

「天宮くんが助けてくれたの…」

「悠介やるじyan！」

「どうでもいいから外へ出るぞ！」

悠介達は急いで階段をおり外に向かつた。

「何とか出られたな…」

「一体どうなつてんだ？」

外はもう真っ暗である。明かりは街灯位しかないくらいだ。

「とにかく市街地までいこう。何かあるかもしれない。」

「でも、またゾンビがいるかもしれないよ？」

暫しの沈黙。それぞれの考え方があわないのも問題である。

「やっぱり市街地に行こう！ あそこデパートとかがあるからしばらくは大丈夫なはずだ！」

「わかつた。じゃあ悠介の言つとおりに市街地に行こう。

「いいな水島？」

「うん…」

三人は市街地へと向かつた。

「生存者は？」

静かで小さい声だが部屋中によく響く声だった。

「今は七人ですね…」

小柄の男が答えた。此所は何処かの研究所のようだ。コンピューターから分かるが、日本製のばかりである。とすると此所は日本のどこかとも考えられる。

辺りは電気などもなく、あるのはコンピューターの画面の微かな明かりだけだった。

「七人もいるのか…

あの学校から脱出したか。」

「アンブレラから渡されたのは同じくT・ウィルスですが、極めて効果が弱いようです。また突然変異もあまり少ないと考えられます。」

T・ウィルスとは元々は戦争で不死身の戦士を作るために開発されたのだが、不死身になつたもののその人間は理性を失い「生ける屍」つまりゾンビとなってしまう失敗作。

「では我々でもう少し研究を続けよう。カインズ社の名に恥じないくらいな。」

『了解。』

研究者達はまたパソコンの画面に向き合つた。

「アンブレラからの命令で実験だからな。失敗は許されない。此所にはアメリカの様に強い軍隊はない。あるのは平和ボケしたカスどもだ。」

また彼ら達は闇に消えた。

何時もと変わらない夜の市街地の風景。ただ変わっているのは悠介達の心情と夜の不気味さ。悠介達は市街地まで歩いていた。

「なんでこんなになつちましたんだ……」

悠介は呟くように言った。官次郎はそれを聞き逃さずに答えた。

「これは何かの自然現象か？台風とか……

ああ、あれだ！今流行りのタミフル……

「カンちゃん！」

悠介は冗談を言つた官次郎にきつに口調でいった。

「う、わりい……」

「強く言いすぎた。俺の方こそ」「めん……」

悠介と官次郎の空氣が控え目になつたとき、理名が口を開いた。

「……つか。」

「どうした水島？」

「新田君が言つたことは間違いじゃないと思つ。タミフルとかそんなじやくて、何かに触れたり含んだりすると発症する何かのウイルスだと思うの。だから下手に何かに触れたりしないほうがいいと思う……の。」

流石は頭脳明晰と言わんばかり頭だなあと感じた二人だった。

「なるほど、じゃあゾンビが人間を喰うと喰われた方の人間もゾンビになるってわけだな……」

その言葉に悠介と理名は驚いた。

「カンちゃん、なにそれ？」

「あ、言わなかつたか。俺がゾンビと会つたのは丁度部室の中だつたんだ。一匹のゾンビを金属バットで倒した後に一息つこうと思つたら、喰われて死んでいたはずのゾンビが生き返つたんだ。」

理名が言つたことは間違いじゃなかつた。例えば、ゾンビが身体中にウイルスがあるとするとする。理名は何かに觸れたりするとと

つた。ゾンビは人間を捕まえて肉を喰らおうとする。その時に、ゾンビの唾液が人間に触れて体内に侵入。新田が言つた通りだと、ゾンビとして発症するのは時間がかかるらしい。生き人であろうが死人であろうが……。

「じゃあ理名が言つた通りにもなるな……」

悠介たちは更なる不安に襲われた。

「とにかくだ、市街地を目指そ。デパートにいけば人がいるかもしれない。」

悠介の言葉に誰もが頷いた。

「うわあああ……」

叫び声が聞こえた。またゾンビがいるのかもしれない、三人は直感した。しかし、何故か生存者がいるかもしれないという前向きな考え方があるのだろう。悠介達は走り出した。

着いた時はもう近くの交番が炎上していた。原因は交番に乗用車が突っ込んで炎上したようだ。勿論、周りにはゾンビが数匹たかっていた。何も持つていらない悠介達にとつては何も出来ない状況だつた。ただ見ているだけしかなかつた。

「うううう……」

すると、ゾンビではない呻き声ではない声が聞こえた。辺りを見回すと、炎上している交番の前に人が倒れていた。

「水島とカンちゃんはここで待つてろ。俺が行く。」

悠介はそう言つと倒れている男の場所に向かつていった。近くには五匹のゾンビが溜まつていた。

「歩けるかー?」

悠介はまず状態を確認した。男は静かに頷いた。

「よし、じゃあ彼処に立つておる男女二人の所に向かつてくれ。」

男はその場で立ち、二人の場所目掛けて走り出した。ゾンビの動きが遅いのは不幸中の幸いであり、いとも簡単に抜けられた。

「悠介！」

悠介は交番の中を急いで物色していた。

「あつた…！」

見つけたのは護身用の拳銃と弾が十発だった。

「今行く！」

悠介はゾンビの間をすり抜け官次郎達の元に向かつた。

「何してたんだ？」

官次郎は疑問に思いゾンビを気にしながら悠介に聞いた。

「後で、今は逃げよう。

走れるか？」

男はまた静かに頷いた。そして悠介達は走り出した。

かなりの距離を走つただろう。水島の息が上がつてきただよつだ。官

次郎はその場で止まり、

「もう大丈夫じゃないか？」

と、悠介を止めた。

「そうだな。もうゾンビはこないだろ。まだ住民すべてがゾンビになつていないうだからな……」

悠介は安堵の声をだした。

官次郎は思い出したかのように尋ねた。

「あんた、名前は？」

男は静かに口を開いた。

「…真田幸治だ。職業はカメラマンだ。市街地で何が起つてているのかを調べるためにインスタントカメラを片手にやってきた。」

「わざわざ此方にこられたんですか？ここがこんなになつてているのをご存知で？」

「そうだ。」

幸治はあつさりきつぱり答えた。

「理由はなんだ？」

悠介が追い討ちをかけた。

「この災厄を世界中に伝えたい、それだけだ。」

誰もが呆れた。ただそれだけの為に此所にやつて来たのだから。
「とにかくデパートを目指しましょう。待つていても意味がない
ですから。」

理名が声をかけた。三人は分かつたと合図をした。

「まつてくれ、悠介。お前彼処で何をしてたんだ？」

すると悠介はポケットから拳銃を取り出した。

「これ。おれ拳銃実際に使つたことあるから。」

「そりいえばお前、ハワイで開かれた射撃コンテストで一位だつた
よな？」

官次郎はいらない経験も此所で役に立つ事を実感した。

四人は歩きだしてデパートへと向かい始めた。

デパートの前は何時もと変わらなかつた。

「変わらないデパートなのにこういう状況だと不気味な感じがする
な……」

官次郎は呟いた。

「カンちゃん、変なこと言わないでくれよ……。」

「わりいわりい。」

「速く入るぞ。」

幸治はキッパリ言つてデパートの中へ入つていつた。

「ちつ、いくぞ！」

悠介達は急いで幸治の後についていた。

デパートのなかは明かりはチカチカ点滅するくらいしかなかつた。

「これじゃあ全然分からな……」

「電力を回復させた方がいいんじゃないか？」

「じゃあ探さなければな……」

「きや……！」

理名の少しの叫び声に悠介は反応した。

「なつ……！」

理名の首に何かが巻き付いており、そのまま理名の体は宙に浮いていた。

「水島！…」

悠介はとっさに拳銃を取り出した。中にはさつき入れておいた弾丸六発がはいつている。

「んつ…あああ…！」

顔の表情からうかがえるが、段々と首の縛め付けが強くなっているようだ。

「素晴らしい…！」

こんな生物がいるなんて！」

幸治は理名のことさえ気にせずおくにいる謎の生物にシャッターをおろしている。

その生物はゾンビとは違い、脳ミソの形がくつきりと現れている頭と目がないのが特徴である。身体は一本足ではなく四肢が特徴。なんといっても長い舌を見るものを威風させる。舌は三メートルゆっくりある。

「おー、お前なにしてんだ！…？」

官次郎は幸治を止めようとするが聞かない。時間がたつにつれ理名の表情がけわしくなつてくる。

「悠介！こいつがい…」

「静かにしろ。」

悠介は天井に張り付いている生物の頭に標準を合わせた。

「食らえ…！」

次の瞬間、大きな発砲音と共に生物の頭に命中した。

「ピギヤアアアア！」

生物は大きな叫び声をあげて理名を離した。理名はその場に落下したが、官次郎がなんとかキャッチした。

「大丈夫か！…」

「ありがとう…」

悠介はまた生物の頭に標準を合わせてこういっ放つた。

「死ね。」

言い終わりと共に生物の頭に着弾し頭は吹っ飛び天井から落ちた。そこで絶命した。

「ふう……」

悠介が一息ついた時だった。

「お前なにしてんだ！？」

官次郎は怒りの声をあげた。

「何つて、シャツターをおろしただけだが？」

「てめえ……！」

官次郎は拳を上に上げたとき理名が入ってきた。

「大丈夫だから……ねつ。

結局私助かつたんだから大丈夫！ほら、元気だし！」

「コイツがやつたことが許せねえんだよ俺は！」

官次郎は幸治の胸ぐらわつかんだ。その時、悠介が

「カンちゃん、今は殴っても仕方がない。水島が無事だつて言つて
るなら其処までだ。」

官次郎は少し躊躇しているときに幸治は口を開いた。

「だ、そうだ。」

官次郎は幸治から手を離した。官次郎は何か言いたそうだったが必
死で堪えていた。

「真田さん、俺たち集団と行動している以上助け合いは不可欠です。
だから、もしあなたが勝手なことをした場合、何を言つても俺があ
なたを殺します。」

「……ふん。」

悠介のことばに辺りは凍りついた。悠介からあんな言葉が出るなん
て誰もが思わなかつただろう。

「以後気を付けるよ、天富くん。」

「よろしくお願ひします。」

一通り話が着いたところで理名が声をかけた。

「奥に進みましょ。ここで立ち止まつていては危険です。」

理名の言葉の通り、四人は入り口に鍵をかけて2Fへと向かった。

やつと二話田ですへへ；
長いよつで短いよつですが。字間違いはこれから気を付けます(。)。

じゃあキャラ紹介

真田幸治 26歳

カメラマン。どんな事件もその場所に向かいシャッターをあろし続ける冷酷な人間。

性格は先程申した通り、冷酷でかつ無愛想。見た目からではあって心がわからない。

髪型は七三分け。顔は眼鏡をかけているマニアックそうな顔。
実はなにかの為にシャッターをあろし続けている。

以上 では

悠介達はエレベーターの前にいた。エレベーターで行こうと言つて出したのは幸治である。

「真田さんよお、エレベーターは危なくないのか？エスカレーターなら直ぐなんだぜ？」

官次郎は嫌みを言うような口調でいった。しかし、幸治はそんなことも気にせずにただカメラをいじつてキッパリ答えた。

「バカかお前は。エスカレーターがあるのは一階の中央広場だぞ。中央広場に無事に行けたとしても一階に行くとゾンビがいるかもしないんだぞ？死に行くのも当然だ。」

官次郎はまた怒りだし殴りかかろうとしたが、理名が間に入つてきて大事にはいたらなかつた。

幸治はエレベーターのボタンを押して、最上階の九階から降りてくるエレベーターを待つた。

誰も喋らない。無言のまま迎え撃つ準備をした。悠介は拳銃の手入れ。官次郎は理名の前に立ち、幸治はカメラを構えていた。

エレベーターは一階に到着。

ポーンッ…

エレベーターのドアは開かれた。しかし中はもぬけの殻だった。四人に安堵の表情がこぼれ、エレベーターにのりこんだ。

「はあ、よかつた…」

悠介は手を胸に当てて落ち着けていた。官次郎が二階に向かうボタンをおしてドアはしまつた。

「水島、大丈夫か？」

悠介は理名のことをちらちら気にしているようだ。理名はこの暗黒の中で一輪咲く百合の花のような笑顔で答えた。

「大丈夫、ありがとう。」

悠介は直感した。絶対に無理をしていると。しかし、あえてそれは言わなかつた。それが悠介の優しさだったのかもしれない。

その時、また音がなりエレベーターが完璧にとまつた。四人は早速準備をした。ドアが開いた。

「アアアアアアウウ……！」

するとそこには最悪の景色が広がつていた。そう、ゾンビがいたのだ。数は四匹くらい。エレベーターのドアの前で待つていたのだ。ゾンビはこちらに入つてこようとする。

「させらか……！」

官次郎は咄嗟に先頭に立つて、ゾンビの腹に蹴りをいた。すると、まるでドミノように倒れていき一時的に自由となつた彼等は、すかさず三階に向かうボタンを押してドアを閉めた。

まだ、出発しないエレベーターとゾンビ達が呻き声をあげながらドアを叩いていることに、四人は死をも覚悟していた。理名は身体がぶるぶると恐怖のために震えていた。幸治はまたシャッターチャンスを狙つている。悠介達が諦めかけたときだつた。

ボーンツ

上へ参ります、のアナウンスでエレベーターは上へ向かい始めた。暗い暗闇の中に一筋が見えた時だつた。

「はあ……どうなるかと思ったわ。」

官次郎の心臓はバクバクしているようだつた。それほど彼等には死が近かつた事を物語つていても見えた。ただ一人を除いて：

「ちつ……チャンスを逃したか……」

幸治は残念そうに言つた。その言葉に今度悠介が反応した。

「逃した…？」

幸治はこちらのせいかのよう言つた。

「あんなに大群のゾンビを田の前で撮れたんだぞ。それをお前らはいつも簡単にチャンスを壊した。せっかくの機会を…」

悠介は幸治の話の途中にもかかわらず幸治の胸ぐらを掴んだ。

「お前、自分が言つてることが分かつてるのか？人の命をまるで塵のように言つてることも承知済みか？」

「ああ、それが？」

悠介は一人が止めようとする前に幸治の顔面に一発撃ち込んだ。幸治はその場に倒れ込んだ。エレベーターからは「エレベーターの中ではお静かにお願いします」と、アナウンスが流れた。

「ふざけるな…！」

幸治は起き上がったが何も言わなかつた。

「何か言え！」

「悠介、やめろ…」

官次郎がようやく止めにはいったと同時に三階に着いたようだ。

「…今度については絶対に許しません。肝に免じておいてください。」

悠介は幸治に一言言いつとエレベーターから降りた。一人も急いで悠介を追つた。

「ちつ…ガキが。」

幸治もしぶしぶついていった。

三階にはゾンビはいなかつた。あの状態でゾンビがいたら彼等は死んでいただろ。またまた彼等は不幸中の幸いだつた。

「ここは安全なのか…？」

悠介は不安そうに言つた。誰もが「分からない」と答えるしかなかつた。

「薄暗いな…やつぱりここも電力がきてないのか。」

ここの明かりも店の看板くらいの明かりくらいしかなかつた。またさつきみたいなのがいるとも考えられる。

「周りには十分気を付ける。またいるかも知れないからな。」

初めて幸治が言い出した。やっとその気になつたようだ。悠介もああ、と言わんばかりの態度を見せた。

此所はいわゆる化粧品のフロアのようだ。どうやら一階と二階が合同でなつてているようだ。辺りは高級そうな匂いと腐臭の匂いが混じつているため今にも鼻がイカれそうになるほどである。

「下手に動き回らない方がいい。四人だと動きやすいから固まつた方がいいだろう。」

悠介の案はなかなかのものだつた。しかし、官次郎は違う意見だつた。

「2：2に分かれないか？四人だと動きも遅くなるし道を探すのも大変だろう。」

悠介はすこし戸惑つたが、官次郎の意見に賛成した。

「じゃあ振り分けはどうするんだ？」

「俺と真田さんでやろう。カンちゃんは水島といてくれ。」

「いや、真田さんは俺に任せてくれ。悠介は水島といてくれ。」

官次郎はあえて幸治ということを選んだ。自分の幸治を悪く思うとする癖を直そうとしたのかかもしれない。しかし、自分が幸治と組むことで悠介と理名の危険を少なく出来ると考えていた官次郎は思つていた。

「真田さんいいよな？」

官次郎はやつと幸治に声をかけた。

「ふん、よろしく頼む。」

悠介も理名と喋つていた。

「また水島とだな。」

悠介はうつすら笑いを見せた。それは理名を落ち着けさせるため。

「天富くんはいつでも頼りになるから助かるよ。」

理名も笑顔を見せた。悠介は少しボヤッとしたようだ。

「おーい、お一人さん！」

官次郎が急いで「ひらりを呼び、作戦を決めると言い出した。

「どうするんだ？」

「悠介は何を考えてるんだ？…さつき今決めるって言つたんだが…」

「ああ、『じめん』『じめん』。」

悠介はあわてて謝った。さつきまでボヤッとしていた悠介には到底聞こえないだろう。

「やつぱりフロアで分けた方が速いな…」

「そうだね。じゃあどつちが違う階にいく？」

「…私はここを探索したいんだが。新田くんの意見を聞かないとな。

「じゃあ俺達はここに残るよ。水島達は違うフロアに頼む。」

「おし、じゃあ集合場所はどうするんだ？」

「携帯を使おう。なら直ぐに連絡が出来るはずだ。いくら街がヤバくなつても携帯は大丈夫なはずだ。」

官次郎は悠介が携帯を持っていること確認すると頷いた。

「よし、じゃあ行くか！」

「みんな、絶対に生きろよ！」

「まあ足手まといにはならんよつ頑張るが、シャッターは降ろすぞ。」

「皆で頑張ろうね！」

それぞれが声をかけると、それぞれの組み合せに別れた。それが向かう場所はただ一つ。

友のいる場所…

FILE 4 (後書き)

この後は悠介・理名組と寅次郎・幸治組に別れます。

頑張らないと…（笑）

「先生、今七人の生存者の内四人がデパートに固まりました。」
またあの研究所。その中の一人の研究員がリーダーらしき人物に声をかけた。

「なに？ならば今試すときだな。アンブレラからたつた今届いたところだ。」

「……？」

研究員誰もが疑問に思った。

「アンブレラが開発したT-001と呼ばれるものだ。アンブレラはタイラントと呼んでいる。それは人間がTに感染した時に、稀に起こる突然変異でなる生物だ。身体は水色に近く、右手には大きな爪があるのが特徴だ。」

そしてもう一つ、プロトタイラントだ。タイラントには劣るものその力は絶大である。これらをデパートに投下したいんだが？」リーダーがそう言い終わると一人の研究員が言い出した。

「では、後の事を考えて今はプロトタイラントだけ投下すればいいのではないかでしようか？」

「いい意見だ。では早速ヘリポートに向かい、プロトタイラントが入っている箱を三階の窓にぶつけて無理矢理投下しろ。おい、だれか操縦士に伝える。」

「了解しました。」

一人の研究員が立ち上がり研究室を出ていった。

「クックク……」

これでカインズ社もアンブレラに認められるのも間違いないな。思わず想像してしまつほどだ……。」

あれから20分位たつと電話が鳴った。

「なんだ？」

「ボックス、投下します。

「わかつた、幸運を祈る。

「…成功しました。」

「」苦労。では帰還せよ。

また闇へ消えた…

悠介達のグループから離れた官次郎・幸治グループはまだ三階を探索していた。

「まだ二階が精一杯なのか？ゾンビ共は。」

官次郎は少し氣をゆるめてリラックスしていた。幸治は無愛想な声で「さあな」と答えた。官次郎はまたキレだしそうになつたが必死で抑えた。

三階は至つて普通だつた。流石に明かりなどのレベルは二階や一階と同じだが、臭いや氣配といったものはなかつた。

「たしか、三階は完全に隔離されているって言つてたな……妹が……どうやら三階はエレベーターのみしかいけないようになつてているようだ。誰がこんなにややこしい建て方をしたのかは分からぬが、実際はエレベーターに特別なカードを射し込んでいるVIPエリアと呼ばれているフロアである。そのカードの忠告もやはり電気の停止で動かず、緊急の予備電力で動いているエレベーターには作動しなかつた。

「不幸中の幸いか。しかし何が出るかは分からないから氣を付ける。」

官次郎は分かつてると言わんばかりの態度をとつていた。

官次郎はふと思つた。自分にはたつた一人の妹がいたことを。親は自分六歳の時に他界しており、親戚のところで育てられた。ちょうど妹は中学一年生だつた。官次郎は急に不安になつた。この災厄の中で無事なのか。まだ今は5時。5時といつても冬なので辺りは真つ暗である。官次郎はエレベーターに戻りだそうとしたとき、幸治が止めた。

「放せつ！－！」

「誰が放すか。一つ聞くが何処に行くつもりだ？」

「妹のところだ！」

「ほつ、この災厄の中でいくのか？しかも一人で。」

「そうだ！だから放せ、コラアー！」

「じゃあ聞くぞ。お前一人で行けるのか？」

「いつてみなきや…」

官次郎は思った。自分の力だけで本当に妹を助けられるのか。

「もしだ。万が一行けたとしてもどうする？携帯で連絡するのか、自分達だけでするかは知らん。しかし、どちらにせよ迷惑をかけるのは変わりないことだ。今は信じるしかないんだ。」

「……ちつ！」

官次郎は自分の肩を掴んでいる幸治の手をふり払った。幸治も何も言わずに歩き出した。

「おい…」

官次郎は幸治を呼び止めた。幸治は足を止め無言で官次郎に振り向いた。

「……ありがとう。もう少し状況を把握しないとな。」

「いや、いいんだ。俺もお前達と会つてやつと集団の大切さに気付いたからな。」

「ならお互い様だな！」

官次郎は嫌な空気を吹き飛ばすように言いはなつた。

「じゃあ先に進むか。」

幸治はまだ探索していないエリアに歩き出した。…と思ひきや急に足を止めた。

「どうした？』

官次郎が問うと、幸治は呟くように言い出した。

「……言つてなかつたな。俺が集団を嫌う理由を。」

幸治はこちらを向いて言い始めた。

「俺は最初のころは集団を大切にしてきた。だが、集団の意見はほとんどが多数決で決まってしまう。俺は自分が思った意見と違つてもあまり言わなかつた。だが、ある日その意見のまにジャーナリストとして戦地に行つたとき、俺以外の仲間が死んだ。その時に

思つた。じんなになるならわざと嫌つて抜け出したほうがいいこと。だからだ。』

官次郎はこの時、幸治には辛い過去があつたことを知つた。その表情はいつもと違ひなにかが抜けていた。

「…すまんな。じゃあいくか。』

幸治はそう言つと歩き出した。官次郎も何も言わずに幸治の後に付いていった。

ただこのエリアを探索するしかなかつた。違う階にいくとまた奴等がいるかもしぬないからだ。官次郎達はまた最初のエレベーターの前まで来ていた。

「結局なにもなかつたな…。VIPエリアだからつてちょっと期待したのになあ。』

官次郎が残念そうに言つた時に幸治もそうだなと呟いた。

「悠介達が心配だけど、今は少し休んでこいつ。』

幸治も近くのベンチに座り込んだ。官次郎も自販機でなにかを買おうとしている。

官次郎はふと気付いた。悠介に携帯で連絡をとりつい。すかさずアドレス帳を開け「天宮悠介」のアドレスを開き電話をかけた。

（トゥルルルル…）

『はい、天宮です。』

「あ、悠介。官次郎だ！」

幸治は官次郎を見つめてなにを喋つているのか聞き取つていた。

『そつちはどうだ？』

「ああ、うまくいつてるぜ。で、そつちはどうだ？』

『ああ。いまのところは奴等とも会つてはいなかつたら大丈夫だ。』

「よかつた。こつちは探索したけど何もなかつたからそつちに行こうか？』

『ああ。いまは四階だから間違えるなよ。』

ド「オオ…！

その時、何処かでなにかが壊される音がした。幸治は音のする方に振り向いた。そこにはあきらかに人間ではないなにかがいた。

「何者だ……！」

幸治はベンチから立ち上がりシャッターを下ろした。その何かは此方に気付いたのか歩みよってきた。いくら店の看板の明かりでも、相手の容姿や状況はわからない。

「新田、はやく電話をきれ。」

幸治の声に気付かないのかいつこいつこ起きるとはしない。

「新田……」

「悠介ちとタシマ。なんだ？」

「……！」

官次郎もやつとその何かに気付いた。

『カソちゃん？』

「悪い、いま起きるわ。」

『えつ、ちょつ……ふつつ

「……」

官次郎達は後退りしながら何かを注視している。もつすぐ何かに微かな月光があたるのを待っていた。

何かはは姿を現した。容姿は体は服をきていない。体色はすべてが深緑色である。髪の毛もなく、あるのは人間とは思えないほど鋭い眼光。そして右手にある人の背丈ほどありそうな巨大な爪。

「何物だ……？」

官次郎は恐怖を覚えた。幸治も一回シャッターをおろして、自分の安全に回りだした。

「どうするんだ……？」

官次郎が幸治に問い出した。幸治もただただ後退りしているだけだつた。

「ここは冷静にしないとヤバイな……。」

先に動いたのは奴の方だった。自分の顔を見られたのを嫌うかのようなタイミングだった。

「オオオオオオ！」

大きな雄叫びをあげた。そして、右手の大きな爪を振り上げてこちらに向かつて走ってきた。

「逃げねえ……」

官次郎は恐怖を感じた。死ぬという感覚が迫つてきていた。しかし、こんな官次郎を助けたのは幸治だった。

「新田しゃがめ！」

官次郎はすかさずその場にしゃがみこんだ。すると、官次郎がさつきまでいた場所に爪が降り下ろされギリギリにかわせた。

「うお！」

「新田！ 静かにしろ……」

二人が静かにすると奴は辺りを見回し始めた。どうやら、耳が発達、いや退化しているため官次郎達が下に隠れていることもわからないようだ。万が一、下を確認しても周りの暗さで見えないだろう。そして奴はいないことを察したのか、官次郎達から離れていく。

「はあ……」

官次郎は一息つく。幸治も少しリラックスしていた。

「ここは危ないな。とにかく上を目指すぞ。」

「分かった。」

官次郎達は一応忍び足で近くのエレベーターに向かつた。運良く、エレベーターは三階で止まっており中にも誰もいなかつた。

「急げ」

幸治が四のボタンを押した。彼等は四階へ向かつた。

FILE 6 合流編（前書き）

可笑しい文字などはなるべく気を付けてますが、可笑しいときは頑張つてください。（笑）

（・・・）…

官次郎からの連絡は途絶えた。悠介はなぜかいつたのかはうつすらしか分からなかつたが、瞬時に感じた。

「誰かとあつたな……」

悠介は念のために理名にも伝えることにした。理名といつと、自販機で買ったカップのコーヒーを飲みながらベンチに座つていた。

「水島、今から三階に向かうぞ。」

いきなりの言葉に理名は驚いた。

「三階つて……新田くんと真田さんがいるところ?」

「ああ、何かと遭遇してしまつたらしい。助けにいこう。」

悠介は前のエレベーターのボタンを押そうとした、が理名は行いつとしない。

「水島?」

悠介が疑問に思い理名に再度問い合わせた。

「助けに行くつていつても、私たちでなにか出来るかな? 逆にお荷物になるんじゃないかな……」

ここで悠介が言い始めた。

「じゃあここでずつとまつてるのか!?

仲間が危ない状況なのに黙つて待つて待つてなんて考えられない!俺は行く……!」

悠介は勢いあまってエレベーターのボタンを押してしまつた。三階にあるエレベーターのランプがついた。

「……私はなんとも言えないよ。天富くんが行くならいいよ。私はここでずっと待つてるから。」

悠介は後悔した。理名の口調は荒くないが自分の言つてていることは決して間違つていないと。後悔した悠介の前のエレベーターは刻々と時間を告げる。

「……俺が間違つてな。」めんな、つこ仲間のことにになると前が見

えなくなるんだ。だから水島の考え方も分からなかつた。

こういうのが集団を壊すのはわかつてゐる……わかつてゐる……けど俺は行く。とにかく助けたいんだ！」

悠介がそう言い終えると、理名は何かを言おうとしたが先にエレベーターのドアが開いた。

悠介は銃を構えた。しかし、中にいたのは幸治と官次郎だった。

「お前ら……！」

悠介は銃をホルターの中にしまい、二人の歩く道を開けた。

「お、悠介！ よかつた無事だつたのか。」

「それはこつちのセリフだ！ 何と会つたんだ？」

その質問に幸治が答えた。

「とにかくゾンビではなかつた。名前はわからないが容姿は……幸治が答えると、悠介の顔が少しづつ不安に変わりつつあつた。まだゾンビでも苦戦する自分達にまだ強い物がいるという恐怖。

「……本当なのか？」

悠介は彼等を疑つた。理名も此方の状況を悟つたのか、不安の表情を見せてゐる。

「ああ、幸治さんが居なかつたら俺は死んでたと思つ。」

「新田、それはお互い様だと言い出したのはお前だぞ。また引っ張るな。」

「すんません……」

「まあ、私もお前がいたから私も助かつたんだがな。」

悠介はこの二人からの会話から、二人は仲がよくなつたんだなど。

「まあ、とにかく理名も入れて四人で話し合おう。敵がいるなら大変だからな。」

悠介達は理名とじりへ向かつた。

「その時に壊れたところは何処なんだ?」

その質問にまた幸治が答えた。

「運悪く、三階を無視して上がろうとする階段のところだ。だから三階にはゾンビが侵入してしまつ状況になつてゐる。」

カインズ社達は（勿論、悠介達にはまだわかつていない）それを狙つてのことだつたようだ。

「さて、どうするか……」

「じゃあここに居ても危ないと思つよ?だからどこにいけばいいかなんて分かんないけど……」

初めて理名が口を開けた。今一バツとはしないがその方が得策だと思つたのか、悠介が口を開けた。

「じゃ出来るだけ上の階を田指そつ。上で多くのゾンビを呼んでから一気に下に降りよう。どうだ?」

後先何をすればいいかわからない彼らにとつては一筋の希望の光にも見えた。

「よし、じゃあ五階に向かおう。一階ずつ上がらないと呼べないからな。」

官次郎の合図とともにエレベーターに向かつた。幸い、ゾンビはボタンを押すことが分からぬのかエレベーターはずつと悠介達を運んだままだ。

悠介達はエレベーターの中に乗り込んだ。

扉が閉まりますのアナウンスで閉まった。

グーンと上る音をたてて五階を田指してくる。悠介は一番先頭にたつて銃を構えていた。

『五階、五階です。ホビー エリアです。』

扉が開いたがそこには誰もいなかつた。安心してエレベーターから下りると、いつもと変わらない人気キャラクターの置物が迎えてくれる。

「まだここは大丈夫っぽいな。」

悠介達はまた近くにあつたベンチで一息入れた。

「なあ、俺達以外に生き残ってる人いるのかな？」

官次郎が不意につぶやいた。彼らにとつては生存者はかなりの助けになる。だからこの災厄から脱出すると同時に、生存者も助けるとこう大切な事もあるのだ。

「いるかもしれないな……でも俺達だけで助けられるのか？」

悠介が不安げに言つと理名がきつぱり言つた。

「助けよう！私達なら出来ると思つから。」

それについて幸治も言い出した。

「そうだな。やってみるだけやってみよ。」

四人は立ち上がりこのフロアの探索に向かつた。

ホビーエリアはどの階よりもアミューズメントの数が多く、この廊下の中にはテニスコートやフットサルのコート等がすべてこのホビーエリアの中にあるのだ。

「しかし広いな……」

思わず漏れてしまつた言葉。ここを四人一組で回るには少しきついかもしれないと思うほどである。

「一人一組に分かれよう。今度は俺と真田さん、カンちゃんと水島で分かれよう。」

「じゃあ俺達はAブロックに向かうわ。Bブロックはそっちに任せていいか？」

「ああ。」

このホビーエリアはAとBの二つのブロックに分かれている。Aは主にアミューズメントばかりであり、Bはおもちゃ売り場やゲーム販売店といったものが密集している。

「待ち合わせとかはどうするんだ？」

「俺と悠介で携帯で連絡を取り合おう。あと、細かいところでもいいから連絡してくれ。」

「わかつた。そつちもな。」

真田は水島に氣を使つていたのか自販機でコーヒーを買って渡していた。

「天宮くん、たまたま買つたんだがコーヒーでもどうかな?」

「ああ、ありがとうございます。」

「新田、ほれ。」

「ありがとうございます。」

「オレンジジュースじゃないですか!?」

「新田は少し気を配りすぎている。良いところにも配つているが、余計な部分ばかりだから甘い柑橘類をとつて落ち着けということだ。」

「……だからつてこれは。」

「いらないなら返せ。」

「貰います!貰えばいいんでしょ!」

「分かればよし。」

幸治は無邪気な官次郎に初めて笑顔を見せた。決して心を許さなかつた幸治、もようやく彼らの中に溶け込んだ。

「飲み終わつたな。じゃあ探索しよう。」

悠介が立ち上がり一番先に紙コップの容器を「ミミ箱に入れた。後についで理名達が入れてもう一度同じ場所に集合した。

「じゃあ急ぐか。ここでのんびりしてたら奴等が来るかもしれないからな。」

「じゃあ私は新田くんとだね。」

「じゃあ真田さん、行きましょうか。」

それぞれのグループは目的の場所に向かつた。微かな希望を探しながら…

だらだらですこません(・・・)
田々精進します(・・・)

官次郎と理名はBブロックの中心部にいた。

辺りは「インを入れて遊ぶ」インゲームや、お金を入れて遊ぶ「F O キヤツチャーやーケードゲームなどが敷き詰められていた。

「こんな所に脱出口なんてあるのかよ…」

「ゆっくりはしていられないから出来るだけ早く探ししましょう。」

あまりの広さに自分達がどこにいるのかも分からなくらいだ。それを察して官次郎はこう言った。

「水島、出来るだけ離れるなよ。俺が大変になつちまつからな。」

笑い半分の口調で理名に言った。理名は思つた。今までずっと上に立つて上から口調の男は誰一人もいなかつた。そのせいでいくら向こうとの会話が弾んでも、自分は浮いてる気がしたからである。しかし、今まで一度もしゃべつた事がない二人が自分の理想の人だとは思わなかつた。理名は正直嬉しかつた。理名は笑顔で「うん」と頷いた。

まだ周りに奴等の気配はなかつた。一刻も早く見つけることが鍵となる。官次郎は、まず自分がどこにいるのかを知るために地図を探すこととした。勿論、手分けしてではなく一人で探すこととした。ゲームにはやはり電力が来ていないので画面がついている物は一つもなかつた。それが彼等には逆に不安を与えた。

「しつかし暗いな……

近くの緊急用の明かりと用光を頼りにするしかないか。」

彼等は近くを離れないように探し回つた。しばらくさがすと、

「新田くん、あれは？」

理名が何かに目をつけた。それはこのブロックの物だと思われる地図だつた。

「おっ、ラッキー！」

官次郎はまるで子供のように地図まで駆け寄つた。理名もそれにつ

られて走った。

地図は大きいデパートだからといって地図も大きい事はなかつた。普通のサイズであつた。官次郎は急いで非常口がどこにあるか探した。

「……つてこじド真ん中じやん一非常口は△ブロックの方が近いしな。じゃあこいつ

（中略）

でいいかな？」

官次郎は理名に簡単に悠介達との合流地点を教えた。理名も分かつたと頷きそこまで歩くことにしようと出て出した。

……ときだつた。官次郎が足場に何か無いかと探したとき、地図の右側に何かがあつた。それは紛れもない死体だつた。やはりこの死体も喰われていた。

「……」

官次郎は理名には言わずに手を引いて速歩きで歩いた。

「新田くん……？」

「合流地点まではかなり距離があるからここのペースで行こう。」

理名には官次郎の意図が分からなかつた。

官次郎はあの死体はまだ新しいと分かつていて、だからこそまだ周りには奴等がいると直感したようだ。そしてその直感はあたつてしまつた。

「新田くん、少しゆづくり行かない？まだないみたいだし……」

「いや、きてる……」

「えつ……？」

理名が少し耳をすませたとき何かが聞こえた。

「……オオオオオ……」

それは紛れもなくゾンビ共の呻き声だつた。このブロックに響き渡るくらいの大きさのを上げるなら相当の量の奴等がいるだろう。

「ちつーもつきたか…」

官次郎は理名の手を強く引つ張つて走り出した。

「かなりの量がいるみたいだ。多分近くの階段から上がってきたかもともとこにいたかだな…。」

官次郎は困まれての可能性があると考えたようだ。

「新田くん前！」

考え方をしていた官次郎が、理名の叫んだ方を見るとそこには一匹のゾンビが立つており、気付いたのか此方に向かつてきた。

「あんまり出会いたくないんだけど…」

今は逃げるぞ…」

官次郎はゾンビの間を理名を必ず自分の後ろになるように切り抜けた。

「あいつらが心配だ！出来るだけ速く行け。」

官次郎は強く理名の手を握り走り続けた……

悠介達は官次郎達と別れたあとずっと同じところをつぶつぶしていた。

「…真田さん。これで何回田でしたっけ。」

「多分、六回田…。」

ふたりからは溜め息が漏れた。

「せめて地図でも探そつか。」

幸治の案で地図を探すことになった。……が、彼らはまた迷つてしまつたようだ。

このブロックはBとはちがい親と子供がはぐれてもいいように、そして見付けやすくなるように全体が円周上になつていてるのだ。だから何処に行つても同じ場所に帰るようになつていてる。

「もういやだああ！」

悠介がとうとう痺れをきらした。さすがの幸治もこのブロックに呆れたかのように座り込んでしまった。

「もう一度やってみようか。このままだと危ない気がする。」

「…分かりました。」

悠介は嫌そうな顔でしぶしぶ立ち上がった。そして、今度は反対

の方向に壁づたいで歩き始めた。

探すこと約五分。

「あつたぞ！」

幸治が見付けたようだ。それはまさしくこのブロックの地図だった。先ほどの通り、ここは円周上のことだ。

- たにたに

「近い」

新田達と連絡をとる必要があるな……

幸治の指示通りに悠介はホケットから携帯を取りだし、手早く操作により数秒後には携帯は悠介の耳にあてられていた。

一一一
ノノノノノノノノノノ

「どうだ？ 天富くん。」

「阿カエウハシカミ」

悠介は不安げに呟いた。この時の官次郎は丁度、理名の手を引いて歩き出したときだつた。

が悠介はコクンと頷いた。

三常口に今来た道を戻る必要がある。思ひにがい、さがれ等が来てしまふかもしない。」

幸治は手に取り早く済ませて田畠地までの道を直掛けで歩き出した。悠介も幸治の後に付いて歩き出した。

しばらくたつただろう。幸治が急に足を止めた。悠介は疑問に思い幸治に問い合わせた。

「典二」。

悠介も静かにしていると何かが聞こえてきた。それは、今までで絶

対に出会いたくないやつだった。

「ゾンビか……」

幸治は、ポツンとそつそつと走り出した。悠介はあわてて追いかけた。

「真田さん、少し待つてください！」

悠介はまだなにかを分かっていないようだ。そんなことは気にせず

にスパツと幸治は言った。

「喰われたいか？」

悠介はすぐに分かった。来るのは奴等だと。その為に今逃げているのだと。

「……分かりました。」

悠介もスピードを上げた。どうやら囮まれたしまったらしい。微かにしか聞こえなかつた呻き声も徐々に大きくなつていた。ただでさえ不気味な声なのに、この看板の明かりしかないブロックでは余計に不気味さが増していた。

「真田さん、ここは……」

悠介が拳銃に手をかけようとしたが幸治が止めた。

「ここでは不味い。弾の確保も後々大変だが、気付かれる可能性が高い。今は逃げるしかない。」

拳銃から手を遠ざけた悠介は、後ろを振りかえると案の定ゾンビが6、7匹固まつて此方に来ている。

「感染が酷いようだ。かなりの災厄だな……

本当に人なのか……」

幸治は今さらだがと言いながら言った。悠介もまだなにかは分からぬ。ただ分かることは生き残ること……

リハーサル 8 (前書き)

更新は「こんなスピードでしごれた」と思こます。
どうぞ宜しくお願いします(つ)

両者は走っていた。もちろん、奴等から逃げるために。そして友と会うために。

「よし！目的地まで着いたぞ！」

先に着いたのは官次郎達だった。目的地はいたって損傷はなく、かなり綺麗な状態だった。

「悠介達はまだか！」

官次郎が叫ぶ。が、くるのは悠介ではなく大量のゾンビ達だった。

「ちつ、あの薄のろ！」

「悪かつたな！」

声がした方に向くとそこには悠介と幸治が立っていた。

「よう、生きてたか。」

官次郎は冗談まじりに言つた。

「おいおい、そんなに縁起の悪い事を言つなよ。こつ見えても陸上部だぜ？」

悠介は半分笑つて、半分は厳しい顔で言つた。

「二人とも喋つてると来ちゃうよ！？」

理名が一人の会話を遮るように言つた。辺りは囮まれているのだろう、声や足跡が聞こえていた。幸治も先に先導していた。

「じゃあ急ぐぞ！」

悠介は走り出し、後の二人もそれに合わせて追いかけた。

「近くにエスカレーターがあるから其の所を使おう。次は六階のはずだ。」

幸治の速い判断で四人は素早く動けたようだ。

六階はイベントエリアである。先月は戦隊ショーが開かれていて子供達ばかりで賑わっていた。今月は有名な刀や着物といった【和】のイベントが開かれている。有名な鍛冶屋が叩いた刀が置いてあつた。

「すげえなあ……」

「こんな窮地にいてもつい出てしまつ言葉。悠介はしばらく立ち止まつて眺めていた。

「天宮くん、今はそんな時じやないはずだ。速く行動しよう。」
悠介はしぶしぶその場から離れた。しかし、悠介と同じ行動している奴がいた。

「新田！」

官次郎だった。しかし、幸治の声に反応しない。幸治は少し怒り氣味に官次郎の近くに歩み寄つた。

「新田！ 聞いてるのか！？」

幸治の声が上がつた後にようやく官次郎が声を出した。

「これにするか……

幸治さん、少し離れていてください。」

幸治はわけがわからなかつたが官次郎の言つとおりにした。

「せーのっ！」

官次郎が助走をつけて刀を守つているガラスを蹴り破つた。ガラスの割れる音に驚き、悠介と理名は慌てて戻つてきた。

「なにがあつたんですか！？」

理名が強い声で言つた。官次郎がハイッと手を上げた。

「何してんのカンちゃん！」

「こうするため。」

官次郎はずかずかガラスの中に進入し、中に展示してあつた刀を手にとつた。

「これがかの有名な村雨か……剣道を習つてゐる俺には夢のまた夢の名刀が俺の手中にか。」

官次郎は剣道を習つていたようだ。その腕はかなりのもので名人も顔負けである。実際に本物の刀を使って実践をしたことあるようだ。

「これからお前は俺のもんだ。よろしくな！」

官次郎は刀に向かつて笑いかけた。そんな姿には誰も声をかけることはできなかつた。今まで堅かつた官次郎が久しづりに見せた初め

ての笑顔だつたからである。

「……わりい。行こうか。」

官次郎は悠介達の元に戻つた。

「悠介、お前ばかりがいい格好させないぜ。」

官次郎が悠介に刀を突きつけて言い放つた。悠介も、刀を自分から反らすと「ああ」と一言言つて笑顔を見せた。それだけでも官次郎に伝わつたようだ。

「話はそのくらいにして今は脱出口を目指そう。黙つて待つていても危ないだけだ。」

幸治は偶然見つけた地図からエスカレーターを探し、そこから屋上を目指すようだ。

エスカレーターは上の階に行きたくても、エスカレーターは一階と二階とを繋ぐようになつていて、一階分しか繋がつていないのである。それは、不便の面ばかりが目立つようだが、様々な所に移動していく商品を見つけて欲しいという願いもこもつてゐる。そのためエレベーターがあるようだ。

四人は足音で気付かれないうよ、遅くもなく速くもない速度で歩き出した。

七階のエスカレーターを探すために通つた六階の通路は安全だつた。四人は無事に七階へ続くエスカレーターに乗れた。

「ふう、いつもひやひやするぜ……」

官次郎が刀を杖がわりに使って休んでいるなか、悠介は常に拳銃を眺めていた。

「何時来るかわからん。また初めてデパートの中に入つたときにはた奴がいるかもしねんしな……」

幸治は念おしに言つた。官次郎は分かつてると簡単に流した。

「七階につきますよ。」

理名の声に反応し、辺りを注意しながら七階に降り立つた。見た目は大丈夫のようだ。

「まずは地図を探そう。普通ならエスカレーターを降りた場所にあ

るんだがな……」

幸治はぼやくように言った。今度はその話に悠介が入ってきた。

「なにか意図があつてつくつたんだろう。こんな設計じやあ移動に不便だよな。」

悠介もこのデパートについて分かつてきているようだ。エレベーターを使えない彼らにとつてはまったくのことだ。

「とにかく、ここから次のエスカレーターまでは距離があるがあるのは確実だ。出会す可能性はかなりあるから、気を付ける。」

幸治は三人に離れるなと付け足しで言った。

七階はフードエリアのようだ。あらゆる地方の特産品で作った料理店がずっと道に沿つて並んでいた。

「この一本道は逃げる時に危ないようだ。だが、この先にエスカレーターがある可能性は高いはずだ。」

幸治は、様々な道を巡つたあとにエスカレーターがあると考えた。それは、この道が一番の近道で、一番の危険な道を意味する。

「どうする?」

幸治は今度は尋ねた。しばしの沈黙。その沈黙を破つたのは官次郎だつた。

「俺が守るから大丈夫だつて! こんなところで死んだら報われないからな。」

官次郎はにかにかしながら言った。あの二人は幸治の方に向き直り、悠介が「だ、そうですよ。」と言つた。

「分かつた。だがあまり拳銃は使わない方がいい。奴等に気付かれたらまずい。」

幸治は悠介に忠告すると、悠介は一度拳銃を見直し、握つてているのを話した。

「じゃあ俺の力を信用してることか。じゃあ頑張るか!」

官次郎は先頭に立ち、そのまま前に進み出した。呆れた顔見せた三人だつたが、その中にも笑みはあった。

それは、彼等がこの災厄から抜け出せるかもしないという一筋の

希望の光だと信じよひ……

FILE 9 (前書き)

更新が約半年ぶりになつてすいませんーー

ケイタイがやばかったのと、すこし生活が大変でした【、、】

すこしずつ更新するので、また見てください

これからも応援よろしくお願いしますへへへ

官次郎たちが歩いている一本道は、サイドに飲食店が挟むかのよう立並んでいるものだつた。いつ奴等がきても可笑しくない中、今は何事もなく慎重に進んでいる。

「もうすぐだ。最後まで慎重にだ。」

官次郎が呟くような声で三人に言つと、先程よつとしに慎重になつた。

「よし、エスカレーターが見えたぞ！」

官次郎は安心したのか、今までずっと手を掛けていた鞄をはなしてしまつた。

……その一瞬だつた。不意に分かれ道の曲がり角からゾンビが出てきたのだ。

「うわっ！？」

官次郎はなにも抵抗出来ないまま、そのままゾンビに押し倒されてしまつた。

「新田くん！」

理名が叫ぶと、悠介が咄嗟に反応しゾンビに蹴りをいれ、官次郎を無傷で助けられた。

(素晴らしい……)

幸治はよくわからぬことを考へ、三人にバレないようひしゃッタ一を降ろした。

「大丈夫か！？」

悠介が駆け寄り手を差し出すと、官次郎は短くああ、と答えて悠介の手を借り立ち上がった。

「逆に迷惑かけちまつたなあ……」

官次郎がうつむきながら呟いた。悠介は気にすんな、と答えて二力二力している。

「二人とも、そこまではいい。どうやらおでましのようだ……」

幸治が言つて、皆幸治が向いている方向に目をやつた。

いつ見ても変わらない者。奴等だつた。

「だりい。早く上に行くぞ！」

官次郎はまた鞄に手を掛けてエスカレーターを駆け上がつた。三人も付いていく。

八階は屋上の一个下のフロアだ。同じよつこにも飲食店が並んでいる。

「カンちゃん。その刀レプリカじゃないよな？」

悠介が不安げに聞くと、官次郎も不安げに答えた。

「わかんね……」

「ちょっと……」

理名が急に入ってきた。どうやら理名は突っ込みキャラのようだ。

「えーい、使ってみるしかない。」

官次郎は刀を抜くと近くにあつた段ボールに斬りかかった。

「斬れた」

段ボールは真っ二つになった。斬れた断面を見ても、綺麗に斬れていることから、相当な切れ味があるのだろう。

「新田！こんな非常時になにをしている！」

幸治が鋭くいふと、官次郎は飛び跳ねて戻ってきた。

「次のエスカレーターが見えたぞ！」

どうやらこのエスカレーターが屋上に続くよつだ。四人は必死で駆け上がり、屋上のドアをぶち破り外に出た。

屋上は殺風景で、空も相も変わらず暗かつた。

近くにあつたあらゆるものでドアを開かないよつとして、近くにあ

つたベンチに腰掛けた。

「ハアハア、流石にアイツラも時間はかかるだろう。」

悠介は安心し、ベンチをベッドの代わりにして横になつた。

「悠介。一つ聞くけど、水島を助ける時になんでびびらなかつたんだ？」

「私も、天富くんはゾンビに出会つても冷静だし、慣れてるよつて見えるけど……」

悠介はノソッと起き上ると、そうか？と短く応えた。

「こんなときに寝るやつがいるかよ……」

官次郎は悠介を問い詰めた。悠介は面倒くさそうに立ち上がり、官次郎達が座っているベンチの前に座り込んだ。

「……俺が無断で学校を一週間休んだことあったよな？」

二人が頷くと、悠介はまた続けた。

「最近、可笑しな殺人事件が話題になつてたよな？近くの工場で。

一人が頷くのを気にせず、単に呼吸を調えてしゃべりだした。

「それは今の状況と全くと言つていいほど同じことが起きた。そして、俺はその中の生存者なんだ。」

「一人とも驚いているようだ。何か言いたそうだったが、悠介はまた続けた。

「その時はワケわからないまま逃げ道を探したよ。最初にいた仲間もみんな変わり果てて、俺は必死で逃げた。

一人で戦つたよ。自分の為だけに。仲間も捨てて、そして逃げた。工場はなぜか爆発して証拠もパーになつたよ。誰も信じてくれなかつた。でもわかつた、いずれまた起きるつてな。」

悠介の話に一人は何も言えなかつた。驚きと苦しさの重い空気のためだらづ。

「隠して悪かつた。俺がそういう経験をしたことを喋つたらもつと困惑していたと思ったから……」

悠介にも悠介なりの考えがあつたようだ。この事については一人とも深くは追求しなかつた。
ただ一人をのぞいて……

「ああ、俺はもう貴様らの計画から抜ける。」

（正氣か？お前は）の地獄から抜けられなくなるぞっ）

「貴様らの犬になるのはお断りだ。私は仲間と行動する。」

（やはりやくたたずか。
お前には失望した。）

「私はカインズの為に立つのではなく、この災厄を一度と起さないようになりますためにシャッターを降ろす。」

（無駄なことを。まあいいこれで最後だ、じゃあな幸治。）

「真田さん？」

幸治は焦ることもなく後ろに振り返った。そこには水島が立っていた。

「すまん、この事についてはまたの機会にしてくれ。」

「あの…………」

「私は君たちの仲間だ、これは絶対だ。」

「ではなく、天富くんのことなんですが…………」

幸治も合流すると、悠介はまた同じことを話し始めた。

幸治も驚きを隠せなかつた。そして、自分も本当にこのことを話さなければならぬことを悟つた。

「私も言おうか。危険な時にシャッターを降ろす理由を。」

三人は静かに幸治の方を向き、ベンチに座り始めた。

「最初、私は世界にこの災厄を伝えるためにシャッターを降ろすといつた。」

しかし、それは嘘だ。本当はこの災厄を巻き起しした【カインズ】と呼ばれる会社のためだった。」

「カインズって、あの薬品会社の？」

「そうだ。私は実験結果をカメラに納めると言われ、この市街地に下されたのだ。」

「これが実験だと！？」

多くの犠牲者を出してまでする必要があるのか！？」

官次郎が声をあらげて言った。幸治は冷静に話を続けた。

「それは分からぬ。私もそこまでは言われていない。しかし、私は君たちの味方だ。いま決心したのだ。」

幸治は今までにないくらいの声の大きさで訴えた。

「真田さん。俺達は貴方を信じていないと一言も言つていません。だから俺達は貴方を仲間と信じていますし、そんな話で揺れ動くわけでもありません。」

悠介は幸治に優しく応えた。幸治はしばらく俯いていた。

「天宮くん……」

理名がドアの方を指差した。誰かがドアを叩いている音が聞こえてくる。

「とつとつきたか……」

官次郎は鞄に手を掛けたが、幸治が首を横に降つた。

「あそここの非常階段を使おう。ここで迎え撃つては埒があかない。」

幸治は非常階段を確認するために、階段に向かつた。

「大丈夫だ！使えるぞ、速くこい！」

三人は急いで走り出した。

もうカウントダウンは始まつてゐる……

「ウオオオオオオオオ……」

グタグダで下さいません…

書くのに本文を何回も読み直しました…

また原稿も消えてしまつたので、また考え直します…（-_-）

精一杯頑張るので、よろしくお願ひします

四人が非常階段に着いたときにはもうドアは開けられていた。

「後ろを見るな！ ただひたすら下を指せ！」

悠介は自分が最後の列にいるためか、三人に余計な不安をさせないために叫んだ。

いくら奴等が遅いといっても、もうすぐ追い付いてしまう距離までになっている。

「天宮！ 早くしろお前の番だ！」

幸治の声が下から聞こえてきた。悠介は今までずっと手を掛けていた拳銃をはなし、階段を急いで降りた。

「おいつ、二階で階段が途切れているぞ！」

先程のカインズのせいだろう。非常階段はそこで途切れてしまっている。飛ばないと無理な距離だ。

「どうするか……

悠介、いい考えは……つておい！」

悠介はもう助走をつけて飛んでいた。さすが陸上部といったところだろう、軽々と飛び越えてしまった。

「うわあ……気持ち悪いくらいの跳躍力だな。」

官次郎が感心している横で、幸治が助走をつけ飛ぼうとしていた。

「無茶ですよ！ちがう方法を探しましょ……」

「いの見えで体力に自信はある見ておけ。」

幸治は走り出し、衝撃で五メートルはある穴の手前で踏みきつた。

悠介とはいかないが、穴を軽く飛び越えらた。誰もが幸治に驚いた。

「新田くん。先に行つて、私は大丈夫だから。」

官次郎はすこし戸惑つた。

「でも、水島を残すのは危険だ。先にいつ……」

「大丈夫。」

官次郎がいくら理名に言つても、理名は首を横に降つた。官次郎はしぶしぶ助走をつけて飛んだ。

「ウワアアアアアアア……」

ぎりぎり届いたようだ。彼にとつては一番の恐怖の瞬間だつたのか、顔がひきつっていた。

悠介はそんな官次郎を華麗にスルーして、理名に早くと催促した。

しかし、理名は動こうとはしなかつた。悠介はとにかく来いと叫ん

だ。

「……私がいると迷惑かけてしまうのを知ってしまったから……。怪物に教わったときも、天富くんと一人でいるときの発言も。結局、私は迷惑ばかりかけてるから。」

理名は泣きながら訴えた。悠介達はよく分からなかつたが、官次郎が早くしないと後ろから来るぞと言つた。

「私、体力に自信がないから飛べません……。だから新田くんに先に行つてもらつたんです。だからも……」

「いい加減にしろ!」

理名はハツとして悠介を見た。悠介は今までにないくらいの怖い顔していた。

「それが迷惑なんだ!
こんなことに時間を使いたくないのは皆同じなはずだ!
だから早く!」

しかし、理名はしつこく首を横に振る。

「天富くんたちが言つてくれればそれでいいんです。私がここにいれば時間は少し稼げます。
だから……」

「俺たち四人で行動して一緒に逃げる約束しただろ!?俺はお前の苦しむ姿を見たくないんだ!」

だから……頼む。」

悠介がしゃべり終わると、後ろからゾンビの大群がこっちに向かっていった。理名も少し気にしていたが、動こうとはしなかった。

「水島！君が自分自身をどう思っているか分からぬが、私たちは邪魔だとは思っていない！」

幸治がこいつと、

「やうだ！

俺はお前に助けられたこともあつただろう？だから自分を責めるな！」

理名は顔を上げた。その顔はもつ涙でぐしゃぐしゃだった。

ゾンビも後4メートル位にいたとき、悠介は叫んだ。

「理名ー早くー！」

理名は必死で走って飛んだ。しかし、悠介たちがいる場所まで後60？のところだった。

もうダメだ……そう思ったとき、悠介がギリギリのラインまで立ち、理名を抱き止めた。そのまま綺麗にクイックターンをし、勢いで抱き締めて小さく言つた。

「ばか野郎……」

理名は安心して悠介の気持ちに応えた。数秒間、彼等は自分たちの

世界に入っていた。

あれから急いで階段を降り、ゾンビの群れから逃げ切った。そして今は外にいる。

道にはゾンビがうめつくすほど溜まっていた。その中に、まだ生存者と思われる人物達がいた。

「生存者か！？」

悠介は彼等に近寄った。彼等も四人に反応し、最初は銃を構えたが人間であることを確認すると銃を下ろした。

「貴方は？」

官次郎がたずねると、彼等の中の一人が応えた。

「俺は狩野洋だ。」うちの女が信藤鈴。そしてこのガリが藤木宏人だ。」

手短に自己紹介するとまた奴等に顔を向けた。

「洋。もうすぐだ。今から爆弾をしかける、離れるぞ。」

「よし、よくやった。」

「ほら、貴方達も危ないから離れるわよ。」

鈴の指示により、四人も離れた。宏人が何かのスイッチを押すと、今までいた場所が爆発し洞窟のようなものが見えた。

「よし、あの中にいくぞ!」

狩野を先頭に、六人は一気に洞窟に向かって走り出した。

洞窟に入ると、また宏人がスイッチを押し入り口を瓦礫で封鎖した。

「これでいいだろ。」

「どうやらひと安心のようだ。四人は自己紹介を始めた。

「俺は天宮。天宮悠介だ。近くの私立学校に通っている高校生だ。」

「俺は新田官次郎だ。天宮と同じ私立学校の高校生だ。」

「水島…理名です。」

「真田幸治、カメラマンだ。」

三人に今までのいきさつを話した。

「そちらも苦労したんだな。

「私たちは自衛隊だ。この洞窟は自衛隊基地の地下格納庫に繋がっている。基地にいけば、武器も揃えられて身の危険も少なくなるはずだ。」

狩野の考えは間違つていなかつた。四人も了解し、洞窟をただひたすら進んだ。

道中で三人のことを詳しく聞くと、狩野が自衛隊のスペシャリスト。鈴が調合師。宏人がプログラマーという、完璧な組み合わせだつた。

そんな彼等は、高校生、カメラマンという役に立たないといつてもいいくらいの自分達を受け入れてくれたのだ。

「よくこんなところを抜けられたものだ。相当なチームワークがあったのだな。」

狩野たちが感心すると、悠介たちも自分たちのすごさに驚いていた。

「でも、私と洋まではいかないけどね」

鈴は狩野に寄り添つた。少し顔がかわつたが嫌では無さそうだ。どうやらカッフルのようだ。

そんな二人をみて悠介と理名も先程のことを思い出していた。お互に、顔を赤らめ顔を合わせなかつた。

そんな状況を官次郎と幸治は呆れていた。そして宏人はぶつぶつ独り言を言いながら歩いていた。

そんな時間はもうないかもしれない。

彼等は辺りを気にせず、安心だと思い込み歩いていた。

後ろから鋭い眼光が獲物を見るかのようにこちらでいることも知らぬまま…

「……コオオオオオ…」

キャラ紹介が来ました

狩野 カリノ 洋 ヨウ 23歳

自衛隊のスペシャリスト。若くして、防衛大学を首席で卒業。そのまま自衛隊に入隊。

性格は一見厳しく見えるが、中身は優しい。

容姿は軍人なのに、半袖でジーパン。どうやらのんびりしていたようだ。

信藤 シンドウ 鈴 リン 23歳

調合師。薬から爆薬まで幅広い知識をもつている。自衛隊のサポート兼、洋の彼女。軍人の中でバカツブル。

性格は姉御キャラ。人を虐めて楽しんでいる根本的なS。

容姿はかなりの美人。誰もが憧れる大人の女性だ。軍隊服にベレーを被っている。

(バイオを知っている方は1のジルみたいな感じです。)

藤木 フジキ
宏人 ヒロト 24歳

プログラマーと紹介したが、本当は機械系のプロフェッショナル。
誰もが実力を認めている。

性格は根暗でヤル氣なし。あまり軍隊の中ではいい噂を聞かない。

容姿はメガネ美人。服は今流行りの服装を好んで着る。ブカブカな
服と、ダラダラなズボンが大好き。

以上です また聞きたい方はメッセージかメールで。

「なんだ？」

さつきの音に官次郎が反応し、後ろを向いた。

「ここは地下通路だから、上を流れる下水道の音だろ？」「

狩野の応答に幸治は納得いかなかつたのか、彼は聞き返した。

「今の状況から考えると、そう簡単には納得はいかないな。」

「それはない。俺が爆破したのを見ただろ？だから後ろから来るなんてのは考えられない。」

宏人が口を挟むと、幸治も少し納得していた。

「新田の間違いかもしれんしな。」

「ちよつ………」

一方、鈴と理名は何かをしゃべっていた。

「あなた、私が洋としゃべっていたとき誰だっけ？天富くん？一人顔赤かつたわね。」

鈴は意地の悪そうに言った。理名は慌てて言い返した。

「そ、そんな」とありませんよー私は…………」

「私は…………？」

鈴はクスクス笑いながら理名をからかい始めた。

「可愛いわね。好きなら好きって卑く言つたらいいのにね。」

鈴の言葉に理名は仕方がないと思つたのか、口を開けた。

「私は…………」

天富くんのことが好きです。」

「くすり…………」

「どんなところに引かれたのかしら?」

「学校ではみんなの人気者で、みんなのこと良くなれてるいい人です。いつもはふらふらしますが、いざつとときは真剣になつている人です。」

鈴はよく見てるのねと感じていた。

「こんなにお互いが近くにいるのに、何故か遠く見えてしまうものなのね。気持ちを伝えるということは。」

鈴が呟くと、理名も静かに頷いた。

「でも私は伝えます。それがどんな状況だつたとしても…………」

鈴は感心した。最近の子は頑張るのねえ、とおばさんぐわい考え方だつた。

「頑張りなさい。

私は応援しているわ。」

悠介は今までの事を思い出していた。学校から始まり、四人と行動し今は七人になっている。

そこでふと思つた。それはとても大切なこと、家族や友達のことだ。

「……考えもしなかつた。

母さんも父さんも生きているのかなあ……」

悠介は少し不安になつた。カインズは生存者は七人と割りだしているため、生きていることにはあまり希望がない。

「……家族のことか?」

悠介がビックリして振り返ると、そこには狩野が立っていた。

「はい。今になつてから心配になつて……」

狩野は悠介に聞いた。

「君は確か私立学校の近くにいたのかな?」

悠介は小さく分かるくらいに頷いた。

その言葉に狩野は表情を変えた。悠介は特に気にせず狩野の返事をまつた。

「そうか、実はこの状況に陥った初めの場所は私立学校の近くなんだ。
だから…生き残っている可能性は極めて低い。」

悠介はやはりかと予想していたのか、顔もあまり変えなかつた。

「……いい両親でした。

自分のやりたいことを最優先してくれたり、自分がやつたことは絶対に間違いじゃないと言つて、いつも俺を信じてくれていました。

悠介は小さな声で言つた。狩野は目をつむりながら下を向き歩いていた。

人の死。ましてや生ける屍として死にたくても死ねない状況。悠介は考えた。両親に応えられる最後の決断。

それは、あの世に送ることだ。ただ空腹を満たすために徘徊するのではなく、天国に連れていかせる方がいいと。

「だからこそ、俺は生き残ります。」

自分よりも若く、辛い過去を持つついても、前を向いて歩き続ける彼の姿に狩野も驚いた。

そんな個人の話を続けていると、下水道の音ではない音が聞こえた。

すかさず狩野が反応し銃に手をかけた。辺りは緊張の空氣に包まれた。

「なにかがいる……」

しばらくたつて、奴は姿を現した。

「なんだ…！」？

狩野グループの三人は驚いたが、四人はもう知っていた。

そう、カインズが送り込んだプロトタイラントだった。初めて見る恐怖に三人は動けなかつた。

「早くにげる！」

官次郎が叫び一気に走り出した。勿論、奴もおつきている。

「何者だ！」

必死で逃げるなか宏人が叫んだ。無理もない、初めて会つて相手が人間ではないという現実をそう簡単にはとれない。

「とにかく走れ！」

幸治が後ろを振り向かず、ただ地下格納庫に繋がると去れている場所までを走り続けている。

スタートが遅れたのか、奴の方が少し早くなっている。少しでもスピードが落ちれば終わりだう。

「あう……」

最悪のことにして理名が転んでしまった。足を挫いてしまったらしくなかなか立てないようだ。

皮肉にも奴は理名にターゲットを絞り、爪を振り上げている。

「理名！－！」

悠介は走ろうとしたが、この距離じゃ間に合わないと思った。しかし、少しの可能性にと理名に向けて走った。

奴は爪を突き刺そうとするためか、脇をしめ力を入れた。理名は声が出ず、たた泣きながら首を横に振っていた。

「駄目だ…間に合わない…」

誰もが諦めた時だった。

偶然、近くにいた官次郎が理名を連れてそのまま走り出しあつとしていた。

奴は頭に？があるように困惑い、逃げているターゲットを再確認するとなた走り出した。

理名は官次郎に背負われていた。白く美しかった足も、今になつては血で足の付け根は赤く染まっていた。

「ありがとう…新田くん。」

官次郎は少し照れてから、急いで言った。

「お、おれは！お前たちがお似合いのカッフルだと思つたから！だから…俺が世話しないと…ほら、鈍感だし二人とも。」

官次郎はいつもと二カ二カしながら走り続けていた。理名は顔を赤くし、小さく有り難うといい新田にもたれかかった。

「見えたぞ！」

狩野が叫んだ。いかにも頑丈そうな扉で開けるには時間がかかりそうだ。

「宏人！」

「わかつてゐる。今できた。」

宏人は走りながら手榴弾を調合していたようだ。宏人は口を使いせんをあけ、奴に向かつて投げた。

即席で使つたとは考えにくいほど、爆発と威力は絶大だった。

「やりい！」

官次郎は理名を背負いながらはしゃいでいた。その間、狩野はドアの鍵を開けていた。

「よし、行くぞ！」

狩野が先頭になり中へ向かつて走り出した。続けて悠介たちも走つていった。

倒したと思い込んだ七人だつた。しかし、爆煙の中から現れたのは無傷のプロトタイラントだつた。

奴は七人が向かつたとされている方に静かに歩いていた……。

「はあ、大丈夫か？」

七人はロッカールームにいた。

このロッカールームは自衛隊員たちの更衣室みたいな所で、ロッカーの中には本物のライフルがあつた。

狩野は弾を装填している間、悠介は何かを考えていた。

「どうしたの？天宮くん。」

理名が顔を覗き込むように來たので、悠介は少し驚いた。

「あ、わりい。

いや、アイツがあれで死ぬとは考えられないから……」

悠介には分かつていたようだ。そして、奴は今ロッカールームの近くに來ていた。

「でも、あの威力じゃ生きてないとと思うよ？だか……」

「みなさん！隠れてください！」

悠介の指示に六人は疑問に思つたが、言う通りにロッカーや物置に隠れた。

悠介の予感は的中し奴は入つてきた。そして、誰もいなくなつた部屋を見回した。

七人は出ていくだろうと思つていた。しかし、奴はロッカーを手当たり次第に爪で突き刺していつている。

七人は恐怖の表情に包まれていた。

絶望の中に助けはあるのか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4236d/>

bio hazard ~place of promise ~

2010年10月9日21時33分発行